
執事が探すもの

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

執事が探すもの

【Nコード】

N1235BA

【作者名】

ケン

【あらすじ】

十六夜謙杜。この少年が見据える先にあるものは一体何なのか。少年の執事物語が始まる！！！！

プロローグ

もしも……

目の前で友人だと思っていた同級生に裏切られたらどうしますか？

もしも……

自分を生んでくれた両親と喋ったことが無いと言ったらどうしますか？

もしも……

路頭に迷う自分を拾ってくれた心優しい少女に恋をしたらどうしますか？

もしも……

その少女と喧嘩して傷つけたらどうしますか？

これはそんなもしもの出来事を全てその身に受けた少年の傷つきながらも、

子供から大人へ変わっていく道のりを歩いく少年達のお話である。

プロローグ（後書き）

皆さんこんばんわ！！！！初めましてな人もご無沙汰な人もっす！！！！
新作は不定期更新ですが頑張りますんでよろしくお願いします！！！！
感想なんかもくれるとうれしいな！！！！
それでは、さようなら！！！！！！

第1話 動き出す齒車

今日の日本では

上流階級に位置する者達が多数存在する社会に変化していた。あれだけ、財政難だったこの国は今では

財政黒字が何十年以上も前から続いていた。そして、この国も学習をしバブル崩壊や大不況にならないように政策を練り、環境問題にも着手し今では、温暖化などという言葉は学校の歴史の教科書にしか載っていないほどになった。貧困などという言葉もあったがそれも過去のものとなっていた。皆が生きていくのに必要最小限の食べ物、衣類、仕事などが与えられていた。そして、もう一つ昔には無いものがこの世界には存在している。それは……

「チャイムが鳴りましたか。では、今日の授業はここまでとします。委員長」

「起立、礼」

「……ありがとうございます……」

ここは偏差値68オーバーの名門中の名門で上流階級の者が多く集まる聖マリアンヌ学院。

元は女子高であったが昨今の上流階級の使用人の過疎化問題につき男女共学に変わり、上流階級の者が在籍するAR科（貴族「aristocracy」の頭文字二つをもじったもの）

と使用人を育成、指導するTG科というものが存在する。

（育成「training」、指導「guidance」の頭文字二つ

をもじったもの)

「本日、TG科はテーブルでの接客を学んで頂きます」

眼鏡をかけロングスカートをはきカッターシャツをピシッと着こなし
キャリアウーマンの様な雰囲気醸し出しているのはTG科の
教師長の雁菜^{カリナ}である。今、いる場所はAR科の生徒がよく
ティータイムを楽しんでいるいわば喫茶店のような場所。
するとドアが開きAR科の生徒たちがゾロゾロと入ってきた。

「AR科の皆さんは実家の使用人と変わらない態度で接していただきます。」

彼女たちもいずれば使用人としてここを巣立ちます。貴方達も将来、
自らがお使いする主だと思って日頃の練習通りにして頂きます」
そう雁菜が言うとTG科の生徒達がそれぞれのテーブルへと行き
AR科の生徒達にメニューを聞いていった。

「ご注文は何に致しましょうか」

「ではハーブティーをお願いします」

各々の役目を全うしている生徒たちを観察している

雁菜のもとに一本の電話が入ってきた。

「はい、雁菜です」

『あ、もしもし〜カリちゃん?』

「さようなら」

雁菜はそう言うと言つと携帯の通話を切つて胸ポケットに入れた。
すると再び携帯が震えたので出てみると先程の人物だった。

『もゝそんなに怒らないですよ』

「常日頃言っているとおりの勤務中はその名では呼ばないでください」

『はい、それでねゝ例の少年が来たみたいだよゝ』

「!!!!!!!!!!!!!!」

その言葉を聞いたとたんに雁菜の顔が驚きに染まった。

それを偶然見た生徒は普段、無表情で感情表現が

ほとんど無い雁菜の驚いた顔に驚きながらも

自分の仕事へと意識を移した。

『んゝとねゝ。雁菜にはその子を迎えに

行つて欲しいんだよねゝ大丈夫かなゝ?』

「分かりました」

雁菜は携帯を閉じると手を叩きその場にいる

生徒をこちらへと向かせた。

「今から私は所用で抜けますが手を抜かない様に、良いですね?」

「「「「はい!!!!!!!!!!」」」」」

「……………ていうか広すぎるだろ」

一人の少年が聖マリアンヌ学院の広大な敷地で迷子になっていた。

この学院の所有している敷地は噂では東〇ドームが二桁入るだとか。

「何故か学校の中に森林はあるし、湖はあるし寮みたいなのが

3、4個並んでるし。場違いにも程があるだろ」

すると向こうの方から女子生徒が歩いてくるのが見えたので、

これはラッキーだと思いその生徒に聞くことにした。その少女の容姿は靴が見えなくなるほど長いスカートに外人さんなのか長い金髪の髪の毛を両サイドに分けておりいかにもお嬢様です、みたいな雰囲気をしていた。

「あ、なあ」

「はい？何ですの、貴方」

「あゝ実は俺は」

するとその女子生徒は少年の服装や髪形などを上から下までなめまわすように観察していた。

「あ、あのゝ」

「分かりましたわ！！貴方、不審者ですわね！！」

「はあ！？」

誰だっていきなり不審者扱いされてはこのような反応するのは致し方ないこと。

「そのだらしない服装にぼさぼさの髪型、そしてサンダル。どっからどう見ても不審者ですわ！！！！！！」

「おいおい、ちょっと待て。この服はジャージつつて年がら年中着れる超万能な服だぞ。それに俺は不審者ではありません。

今日付けでこの……なんだっけ？あ、そうそう。TG科に編入するんだよ。

じゃあ、俺はもう行くからなカスタードコロネ」

その言葉を聞いた瞬間、その少女は顔を真っ赤にして怒りだした。

「だ、誰がカスタードコロネですって！？この髪の毛は

お母様が結ってくれたのですよ！？それに、このイギリスの名門である

フォルテ家のフォルテ・セラを侮辱するのですか！？」

「おいおい、俺は侮辱なんかしてないぞ」

「しましたわ！！！！もう許しませんわ！！！」

貴方をひつとらえますわ！！！！！」

「は」

セラは腕を振り回しながらこちらに向かってくるが

いかんせんスカートが長いのでふんずけてしまい

地面にキスをするように落ちていった。

「危ね！！！！！」

少年はギリギリでセラを抱きかかえるが少年も

スカートをふんづけてしまい二人して扱けてしまった。

「痛たたたた。あ、悪い、大…丈…夫か？」

少年はセラに馬乗りしており少年の手は

女性の象徴の胸を鷲掴みする形で掴んでいた。

「痛たたた…きゃ」

「ス、ストップ！！！！どこから！！」

どくから叫ばないでくれ！！」

少年は慌ててセラが叫ぶ前になんとかしてその場を離れた。

しかし、少女はたいそうご立腹なのか半泣きになりながら

少年を睨みつけていた。

「あゝそのわりい」

「この変態不審者！！！！！！！！！！」

「おおおおおおおお！！！！！！！！！！」

いきなりセラは立ち上がり少年を全速力で追いかけてきたので

少年も慌てて立ち上がり全速力で逃げだした。

「確かここに来る手はずでしたが…来ていませんね」

雁菜は例の少年との待ち合わせ場所に到着しているが
肝心の当人の姿が見当たらなかった。時間を確認するも
既に待ち合わせの時間をとくに過ぎていた。

「ど、どこ行つたのですか!？」

横から声が聞こえたので横を向くと

息を切らして、まるで狩人の様な眼をしたセラがいた。

「きー！ー！！！！あの変態不審者！！！今度会ったら警察に」

「フォルテさん」

「！！！！、は、はい」

セラはその声に聞き覚えがあつたのか顔を引きつらせ
冷や汗をかきながら後ろを振り向くとそこには、
雁菜が立っていた。

「フォルテさん、今しがた上流階級の者が
吐くべきではない言葉を耳にしたのですが」

「い、いえ！！そ、そんな事はありませんわ！！！！
ほほほほほほ！！！！そ、それでは！！！！」

セラは猛ダツシュで来た道を帰っていった。

「ふいー。ようやく向こう行つたか」

上から声が聞こえたので上を向くとそこには
待っていた当人がいた。

「ケント
謙杜…」

「ん？」

二人の目がパツチリとあつた。

止まった歯車がこの瞬間、動き出したことを

まだ、誰も知らない。

第1話 動き出す歯車（後書き）

こんにちわーケンです。

如何でしたか？もしおかしな表現や矛盾している

ところなどがありましたら感想で指摘して下さいと助かります。

それでは、さようならー

第2話 はじめまして

「謙杜……」
けんと

「ん？なんで俺の名前を」

「んん！！失礼、貴方が編入生の十六夜謙杜君ですね」
いざよ

「え、ええまあ。そう言う貴方は？」

「私はこの学院の教師長を務めている雁菜という者です。
早く降りてきてくれませんか？」

「ああ、すみません」

謙杜は数メートルはある校舎から雁菜の近くに飛び降りると
着地の場所が悪かったのか石を踏んでしまいバランスを崩し
雁菜の胸元にダイブする形になってしまった。

その瞬間、謙杜は何か懐かしい感じがした。

「ん？この感じどこかであったような」

「大丈夫ですか？十六夜君」

「あ、ええ。すみません」

「いえ、お構いなく。では、理事長室に」

「分かりました」

謙杜は雁菜の後についていき理事長室へと向かった。

雁菜についていき歩くこと数分、二人は大きな扉の前で止まった。
扉にはプレートが付けられておりそこには理事長室と書かれていた。
雁菜がドアをノックすると部屋からどうぞという声が聞こえたので
入ってみるとそこには携帯用ゲーム機の画面を食い入るように見て
いる

女性がいた。机の上には理事長、三原氷見ひみと書かれていた。
「理事長」

「あ、ちょっと待ってねカリちゃんと少年。もう少しで
フォ○テXXが倒せるんだよ！！このこの！！！」

あー！来た！！PAが来た！！！！ジ○クホッ○ー3！！喰ら」
理事長が渾身の一撃を叩きこむ武道家の様に叫ぼうとした瞬間、
ゲーム機を何かが貫き壁に突き刺さった。

「あー！！！！！！！！！！私のゲーム機が」

理事長はまるでこの世の終わりの様な顔で

膝をつき頂垂れたが雁菜はそんなことにせず

理事長に言い放った。

「まさか、理事長仕事もせず今まで遊んでいたのですか？」

「ま、まさか。ちゃんと終わらせてからやってるよ」

雁菜は理事長の机に置いてあった大量の書類を

理事長に見せつけると理事長は苦い顔をした。

「ならばこのハンコも押されていない書類は何ですか？」

「あ、え、えっと。き、君が十六夜君だよね！？」

「え、ええ。そうですが、確か貴方は」

「あ、覚えてる！？そうそう編入試験の時に

私が試験官をしたよね、ふふふふ」

「あ、あのー俺の教室は」

「ああ、忘れてたよ！！！！君の担任はこの雁菜ちゃんだよ」

理事長は慌てて言うが謙杜はどうも二人が怪しく見えてたまらなかつた。

「あのー。貴方達は教員にしては若すぎるように
見えるんですが気のせいでしょうか？」

「ありや。何でわかっちゃったの？」

この二人は聞くとところによると20歳らしい。

飛び級制度を使いまくった結果、天才という名を欲しいままにし

19で大学卒業、20で教師という天才街道を歩いている二人だった。

「ええ、まあ、昔に色々あつてね」

それよりも、教室に行かないんですか？」

「ああ、そうですね。それではいきましよう。」

理事長はちゃんと仕事をするように」

「ひゃーい」

二人は自分の教室へと向かっていった。

理事長は二人が出て行くのを確認すると先程のふざけた顔とは違う真剣な顔をして引き出しから一枚の書類を取り出した。

それは聖マリアンヌ学院の推薦入試の推薦状の様なものだった。通常はどこかの有名な家や財閥などから

推薦状が来るのだが謙杜の場合、誰がこの推薦状を書いて送ってきたのかが一切分からなかったのだ。

しかし、封筒の中には彼が書いたと思われる

書類関係と試験料が同封されていたので

そのまま受けさすこととなった。

「にしても彼は素晴らしかったね」

まるで誰かに教えてもらったように完璧だったね」

「ここが貴方が編入する教室です」

「あ、どうも」

プレートには1年1組と書かれておりさっきまで歩いてた渡り廊下もまあ、それはお金をふんだんに使った高級感漂う大理石が敷き詰められておりさらには天井にはシャンデリアがあつたりなかったり。というわけで謙杜は改めて自分が場違いな事を認識させられた。さらに変わっているのが

制服がT G科とA R科では違ってくる。使用人のT G科はメイド服か燕尾服、A R科は赤色の制服である。

「私が呼ぶまでここにいて下さい」

「分かりました」

雁菜が教室に入るとすぐに号令が

聞こえて多くの椅子がガタガタ動く音が聞こえた。

『今日はここに編入生が来ます。T G科所属ですから皆さんもその内お世話になる方も出てくるでしょう。』

早めに話せる相手にしておいてください。それでは、入ってきてください』

謙杜は扉を開けて教室に入ると黒板の前まで行きチョークで名前を書き始めた。

「俺は十六夜謙杜です。この学校の事は全く

知らないのでご迷惑をかけると思いますがよろしくお願いします」
自己紹介を終え、周りを見渡すと一人見知った顔がいた。

「あ、あ、あ、あ、へ、変態不審者！！！！」

大きな声をあげて立ち上がったのは謙杜が事故で胸を触ってしまったフォルテ・セラがいた。

「あ、カスタードコロネ…なんでA R科がいるんだ？」

「この学院とて普通の高等学校です。午前は通常授業、午後はそれぞれの在籍している科のカリキュラムを進めていくわけです」

「へへ。俺の席は？」

「貴方の席は空いている場所ならどこでも」
「分かりました」

謙杜は真ん中の列の前から3番目のちょうど半分の席に座った。ちなみにこの1列は6人であり全員合わせて42人である。

「では、授業を始めます」

第2話 はじめまして（後書き）

こんばんわ〜ケンです。

如何でしたか？皆さんもすでにお気づきかと思いますが面白くないし文章表現も小学生以下ですので

そこら辺は広い心で見えていただければ光栄です。

それでは、さようなら

第3話 授業

「おいおい1年なのに微分・積分かよ」

黒板には微分・積分の公式が書かれていた。

この学校は使用人などを育てる学校とはいえ普通科でもあるため授業はあるのだが流石は

偏差値68越えである。既に1年生で数?・Bに入っている。

「では、ここを十六夜君」

「へ、あ」

「あ、すみません。まだ、教科書が」

「いえ、見せてもらいます。つつ事で見せて……くれ」
となりはものすごい形相でこちらをにらんでいる
セラが座っていた。

「勝手にどうぞ!!!!!!」

「お、おうありがと。えっと、ここはまずは接線の式を
求めてから曲線との交点を調べて後は積分すればお終いです。
ちなみに答えは10/63です」

「正解です。詳しく解説すると」

「チャイムが鳴りましたので今日はここまで。委員長」

「起立、礼」

「……ありがとうございました」

授業が終わり休憩時間に入ると周りの生徒が
謙杜の周りを囲むようにしてやってきた。

「ねえねえ、どこから来たの？」

「生まれは大阪、育ったのはここらしい」

「らしいって知らないの？」

「ああ、両親とは……色々あつてな」

「あ、ごめんね。私はA R科の西宮榛名はるな、よろしくね」

「ああ、よろしく」

「ねえねえ、謙杜君は噂によると推薦入試で入ったんだって？」

「何で知ってるんだ、そんな事」

「ふふふふ。まあちよいちいっとハッキング、

じゃなくてクラッキングをしてね」

「両方さほど変わらねえよ」

「いやゝ男子が増えてよかったわゝ」

「ん？」

後ろから関西弁が聞こえたので振り返ると

そこには謙杜と同じ執事服を着た二人の生徒が立っていた。

一人は背は180くらいあるだろうが、結構高くもう一人の

生徒は茶髪で小柄な生徒だった。

「わいは白鷺郷しひろや。んで、こつちが

わかさぎかいと
公魚海人こうぎや」

「よろしくね、十六夜君」

「謙杜で良しさ。でもさあ、なんでここ男子が異様に少ないんだよ」

「知らなかったんかいなゝ。何か知らんけど入試が難しかったんか

男子生徒はT G科に4人とA R科に1人おるだけや」

「4人？後一人は？」

「あそこにいるよ」

海人に言われ指を差された方向を見ると

端つこの席に座って窓の外の景色を一人で見ている

少年がいた。

「あいつは河原友春や」

「ふゝん」

「そろそろ時間だから行こうか」
「あ、ああそうだな」

「で、なんでプールなんだ」

2人と一緒に来た場所は何故かプールだった。
全員プールサイドに1列で並んでおり水着ではなかった。

「今からの授業はTG科のカリキュラムです。
では、そのままプールに入ってください」
すると全員がそのままプールに入った。

「何で制服のまま？」

「ここでは主人がクルーザー中に海に落ちた場合を
想定しています。服を着替えてる暇など

ありませんので。十六夜君も早く」

「あ、はい」

十六夜もそのままプールにはいると何故か
全員に驚かれた。

「凄いなお前」

「なんでだよ。これくらい普通じゃないか？」

「いやいや、全員を見てみるよ。お前程まで
リラックスしてる奴はおらんやろ？」

周りを見渡してみると確かに全員、沈まない様に
するので精一杯の様で誰かと話す余裕はないように見える。
ちなみに一人だけ浮輪のように浮いている者がいた。

「そうかな」

「うん。服のまま入ると衣服が水を

吸って重くなるからね」

「ん、そうだな…やばい」

「ん？どこ行くんや、謙杜」

十六夜は急に別の方向に泳ぎ出すといきなり潜りだした。

「十六夜君？何をしているのですか？」

雁菜も驚いているのか十六夜に聞いているが水中にいたので聞こえてはいなかった。

と、その時謙杜が一人の生徒を抱えて上がってきた。

「溺れてる人がいましたので」

「げほ、げほ！！」

「すぐにこちらへ」

その生徒はかなり水を飲んだのか何分か苦しそうにせき込んでいた。

「大丈夫か？」

「は、はい」

「では、笠木さんは落ち着くまで休憩を。十六夜君も戻ってください」

「はい」

「ふえ」

笠木は謙杜の背中を頬を赤くしながら眺めていたことには気づいていない。

「では、これよりレベルを上げます」

「レ、レベル？」

謙杜がそう言った途端に急に大きな波が打ち寄せてきた。

「な、なんだこれ！？」

「このシチュエーションは主人が滝の近くの波が非常

に高い場所に落ちたと想定していますので」

「そんな事あるかーーーー！！！！」

「あゝれゝ」

全員、高い波に流されない様に必死に

泳いでいた。白鷺はまあ、流されてはいたが。

しかし、謙杜は鍛えているのか波に押し流される
どころか抗って泳いでいた。

「ふむ、時間ですね。では、ここから休憩に入ります」

「あゝしんど」

白鷺はプールサイドに用意されていた

椅子に座りおっさんのように大きなため息をついた。

海人も疲れているのか少し呼吸が荒かったが

謙杜は全く呼吸は乱れておらず疲れも見えなかった。

「にしても謙杜凄いね。何で泳げたの？」

「ん？あ、まあ」

謙杜の頭の中には一人の少女の

顔が映ったがすぐにそれを振り払った。

「体鍛えてるからな」

「それだけでは理由になっていない」

後ろから声が聞こえ、振り向いてみるとそこには

TG科の4人目の男子生徒の河原友春が立っていた。

「あ、君が河原？俺は」

「知っている。そうではなくただ単に鍛えているだけでは
さっきの高波の中は泳げないと言っている。

泳ぎ方もそうだしさっきの溺れた奴の救助の

仕方もライフセイバーがするものと全く同じだった」

「え、そうなんか？」

白鷺は驚いた様に聞き返すが

謙杜は全く答えようとはしなかった。

「なんで知っているんだ？十六夜」

「まあな、ちよつと両親がな」

十六夜が両親の事になると苦い顔になるのを

知ってか知らずか河原はそれ以上言及しなかった。

休憩時間も終わり再び授業が再開した。

第3話 授業（後書き）

こんばんわ〜悲しいかな。誰もお気に入りなし、しょうもない小説。
ま、これは常識ですかね。それでは
途中で削除するかも

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1235ba/>

執事が探すもの

2012年1月5日02時47分発行